



広報

# あいづばんげ

2 2017 No.630

特集

五穀豊穰を  
願って

東方・紅組が勝利  
今年は米の値段が  
上がる！！

# 坂下初市 奇祭大俵引き

雪が降り続く冬らしい天候の中、新春恒例の初市「奇祭・大俵引き」が今年も盛大に行われ、今年一年の招福を願う大勢の人たちでにぎわいました。

迫力ある俵太鼓が響くなか幕を開け、東西対抗スポーツ少年団俵引きが始まると、寒さを吹き飛ばす掛け声とともに子どもたちは力いっぱい俵を引き合い、祭りを盛り上げました。

スポーツ少年団による俵引きのあとは、いよいよ初市のメイン「大俵引き」が始まるとあって、さらに観客の熱気も増し、カメラを構える人や身を乗り出して引き子たちに注目する人であふれ、引き子たちも気合の入った表情で大俵引きに臨みます。

「引き方はじめ」の合図で東西一歩も譲らない迫力ある引き合いが展開され、三本勝負の結果、今年も2勝1敗で東方・紅組に軍配が上がりました。

総勢130名の引き子が引き合う大俵は、毎年手作業で作られ替えられているものです。今回は、大俵ができるまでの様子を紹介します。



東西対抗スポーツ少年団俵引き

福豆俵引き



坂下初市奇祭大俵引きの様子は、町公式YouTubeにて動画でもご覧いただけます。



祭りに駆けつけたタワライガーとライヴァン



安兵衛太鼓



鏡割り



新春富くじ抽選会



福餅つき



# 坂下の大俵 はこうして つくられる



## 大俵引きの歴史

会津坂下町の大俵引きは、毎年1月14日の初市に合わせて行われる祭事である。「会津坂下町史」によれば、寛永2年（1625年）の時点ですでに初市・大俵引きが行われており、戊辰戦争で一度は途絶え、初市は出店のみとなった時代が長く続いたが、地元青年団などの働きかけにより昭和31年に復活するに至ったという。

明治維新前は現在の町役場前を中心に上と下に分け、勝った方に翌年の露店を立てることになっていた。その名残から現代では東方紅組が勝てば米の値段が上がり、西方白組が勝てば豊作になると言われている。町内外から多くの観客が詰めかける催しの大俵引きであるが、その主役ともいえる大俵は、毎年手作業で新しく作り替えられている。

## 大俵の制作風景

大俵作りは、10月に稲刈りが終わったあと、材料となる稲わらを乾燥させるところから始まる。稲わらの乾燥が終わると、10月中旬からは、俵の縄編みに入る。縄の編み方は、特殊な結び方をするため、習得するには経験が必要になる。

太い縄は、1つの俵に3本使われ、スポーツ少年団による俵引きで使う俵と大俵とを合わせて6本必要となる。注連縄は1つの俵の左右の側面に1本ずつ取り付ける。

12月に入ると、いよいよ本格的に大俵の制作にとりかかり始める。作業場は数年ごとに町内の倉庫などを転々としており、昨年は駅南倉庫で作業した。

## 技術を磨き続けて

大俵づくりでリーダーシップをとり、現場をまとめるのは、40年近く大俵の制作に携わっている桜木町の遠藤重夫さん。元々大俵づくりをしていた知り合いの人に手伝いを頼まれたことから参加し始め、あつという間に年月が経った、と語る。

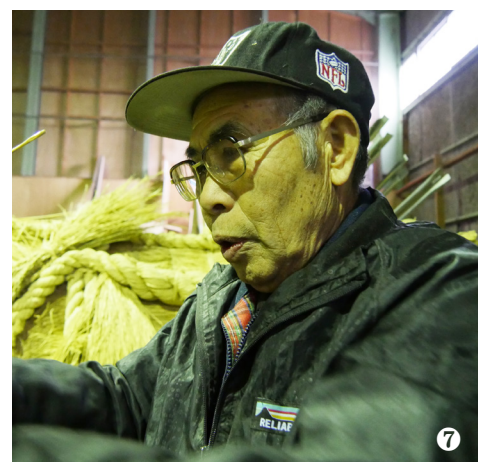
「最初に大俵づくりに参加したときは、大縄を太く作ることができなかった。慣れていないと、どうしても細くなってしまふ。来年はもっと上手に、と思いつながら、いざ次の年になってやってみると、今度は不恰好になってしまった。」

そんな試行錯誤を繰り返しているうちに、40年あまりが経過した。

## 力合わせて作り上げる大俵

俵をまっすぐにし、円柱の側面を囲うように3本の大縄を通す作業は一番重要な工程だ。俵の重心がずれるとバランスが崩れ、俵の上に乗る人が俵引きの最中に上から落ちてしまう危険性がある。

俵に巻き付ける大縄は見た目以上に重く、端と端を合わせ、中央を決めるのも一筋縄ではいかない。重さ5トンといわれる完成間際の大俵



①②大俵の基本パーツとなる藁束と大縄を作る③雪囲いでも使われる結び方で足りない縄は足していく④⑤注連縄を取り付ける作業⑥縄を大俵に巻きつける前のようす⑦現場をまとめている遠藤重夫さん⑧粟、キビ、玄米、青豆、金時豆の五穀が入った藁苞

を、右へ左へと転がしながら作業する。怪我をしないよう、「動かすよー」「縄通ったよー！」などと、声を掛け合う。

大俵作成に関しては、図面などがなく、縄の縫り方をはじめ、すべて人から人へと引き継がれている。今年9名の方々の手によって、大俵が作り上げられた。

**待ちわびた完成、そして来年へ**

多くの報道関係者がつめかけた12月19日の完成時には、五穀豊穰を願って五つの穀物が入れられている藁苞（表紙写真中央）と、注連縄を取り付ける作業が行われた。

報道陣に対して、「今年新しい人たちが入ってきてくれて、指導にも力が入った年だった。私も含めて、長年作業している人たちはみんな高齢になってきている。大俵づくりを任せられる未来の後継者の育成が、これからは重要になってくるだろう。」と話してくれた遠藤さんは、今年も無事に大俵が完成した安心感と同時に、来年、さらにその先に何ができるかということを見据えているかのようである。

奇祭と呼ばれる、年に一度の大俵引き。下帯一本の勇壮な引き子たちが引き合う大俵は、数十年かけて培われてきた経験を持つ方々の技術と歴史の重みが形になったものでもあった。